

## 荏原、ロケット部品に参入

2021/10/29 19:13 日本経済新聞電子版 625文字

ポンプ大手の荏原がロケット部品の開発に参入する。エンジンに燃料を送り込むターボポンプを開発する。宇宙ベンチャーのインターステラテクノロジズ（北海道大樹町）が開発し、2023年度の打ち上げを目指す「ZERO」に搭載する予定だ。

浅見正男社長が日本経済新聞の取材で明らかにした。ターボポンプはロケットの「心臓」とも呼ばれる基幹部品だ。一般的には燃料に液体水素を使用するが、ZEROではメタンを主成分とする液化天然ガス（LNG）を使用する。

高速で回転して高い圧力がかかるため、「ロケットの中でも最も開発が難しい部品の一つ」（インターステラの担当者）だという。もともとはインターステラと室蘭工業大学が共同開発を進めていたが、新たにポンプの知見がある荏原も加わった。

荏原はLNG用のポンプを手がけており、ターボポンプの開発にもこれまでの技術を応用する。荏原の浅見社長は「民間ロケットは今後拡大していく分野だ。航空宇宙分野参入への足がかりにする」と話した。

荏原は21年度から水素関連のプロジェクトを進めている。一般的にロケットは燃料に液体水素を使うことが多いため、ロケット部品の参入を水素プロジェクトの一環と位置づけ、今後も宇宙航空分野への取り組みを拡大する考えだ。

インターステラテクノロジズは19年に、民間企業で初めて単独で小型ロケットの打ち上げに成功している。打ち上げ予定の「ZERO」は超小型人工衛星を搭載できるロケットで、打ち上げ価格は6億円以下を目指す。



荏原が共同開発する部品を搭載するZEROのイメージ図（インターステラテクノロジズ提供）

許諾番号30084746 日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。

本サービスで提供される記事、写真、図表、見出しその他の情報（以下「情報」）の著作権その他の知的財産権は、その情報提供者に帰属します。

本サービスで提供される情報の無断転載を禁止します。

本サービスは、方法の如何、有償無償を問わず、契約者以外の第三者に利用させることはできません。

Copyrights © 日本経済新聞社 Nikkei Inc. All Rights Reserved.